

看護学科通信制課程開設記念講演会・シンポジウム

柳田邦男先生を迎えて

現代社会の生と死を考える

開催日 平成 17 年 11 月 27 日 (日)

エクステンションセンター
地域交流担当 尾崎 雅子

現代の高度に発達した医療では、生命維持装置の発達、臓器移植、遺伝子治療などによって、生命の延長(延命)が最大の目的とされてきた。しかし、ただ延命することだけでなく、その生の内容がどのようなもの(質)であるのか、つまりQOL(生命の質、生活の質)に人々の関心が向けられるようになってきた。

今回はノンフィクション作家である柳田邦男氏を迎えて、第一部では「いのちと生きがい」と題する基調講演、第二部では「延命か生命の質(QOL)か～患者の「選択」、家族の「決断」、医療者の役割割～」をテーマとするシンポジウムが行われた。

第一部 基調講演「いのちと生きがい」

柳田邦男氏は「いのち・命」をテーマに、戦争、災害、公害、事件、病気と医療に関するドキュメンタリー作品や評論を多数発表されている。柳田氏より今回の講演に向けて次のようなメッセージが送られている。「現代は自分で自分の死を創らなければ納得できる人生の最後を迎えることができない。その意味で現代は“自分の死を創る時代”であると私は呼んでいる。それは最後までよりよく生きるにはどうすればよいかを考えることでもあるのです」。講演では、最後までよりよく生きた人の生き方の紹介や、絵本をとおして“いのち”のはなしをされ、自分の人生をよく生きることについて考える機会となった。

第二部 シンポジウム「延命か生命の質(QOL)か～患者の「選択」、家族の「決断」、医療者の役割～」

みどり病院理事長の額田勲氏のコーディネートにより、具英成氏(神戸大学肝臓・移植外科教授)、出河雅彦氏(朝日新聞編集委員)、伊藤由美子氏(兵庫県立成人病センターがん看護専門看護師—CNS—)と柳田邦男氏に加わり、それぞれの立場からの発言があった。医療が高度化する中で、医療者には生命としての「命」だけではなく、精神性を重視した人間としての「いのち」のあり方をみつめる力が必要であり、生命の質を重視した医療の提供を考えなければならない。患者・家族は医療者から延命か、生命の質かを問われ、治療の選択や決断を迫られることに戸惑い、苦悩する。そして、自分たちと医療者の間には、埋まりにくい情報の格差問題があることを痛感する。一方、医療者は死に直面した患者にどう寄り添うことができるのかと行き詰る。会場からは患者・家族、そして医療者のそれぞれの立場からの質問や発言があり、現代の医療の現状とそこに潜む問題が提起され、シンポジストとの意見交換も行われた。

講演会・シンポジウムに参加した学生の反応

講演会・シンポジウムに参加した(看護学科通信生・通学生)に、参加しての感想を自由に求めた。感想を提出した学生は通信生26名、通学生(1年:10名、3年:39名)であった。

【看護学科通信生】

通信生はすでに10年以上の准看護師としての経験があり、その経験を振り返りながら、病気などで自分の命が危険にさらされる状況になった時、自分は残りの人生をどう生きることができるのだろうかという問いをもった学生があった。また、今まで看護師として患者のためにと精一杯やってきたつもりだが、「押し付けの看護だったのだろうか」、「私が家族の替わりになれるようにと想着いても、対象者の寂しそうな表情を見ると無理だということを実感した」など、今まで行ってきた看護に疑問や反省を抱いた学生もあった。しかし、シンポジウムでのCNSの方の話から、「看護師は患者と伴走できるような存在であると理解できた」、「看護師が一人で抱え込むことのないように互いにサポートし合うことが大切である」や、患者家族の方の発言からは「今まで気づけていなかった思いを知ることができた」など、これからの自分のめざす看護を改めて考える機会になったようだった。

【看護学科通学生】

通学生では、3年生は看護学の専門科目をほぼ学び終え、臨地実習で直接患者にかかわりながら学んでいる時期である。実習での少ない体験からは通信生のように自己の看護体験を振り返るほどではないが、実習での場面を思い起こしながら患者・家族の立場になって考え、「進行する病状とよくなりたい思い。病気との葛藤」、「死別は家族にとっても辛く寂しい。しかし、患者も苦しんでいる。家族の別れの決断は辛いけれどとても大切だ」などがあつた。また、「CNSの方の、病気になっても病人になる必要はないという言葉から、看護は健康な部分を忘れてはいけないことに改めて気づいた」、「医療者側の情報を患者・家族に提供することの難しさ」など、看護師としての役割や実際にどうかかわっていけるのかを考える機会になった。

1年生は直接患者にかかわる体験は9月に学んだ基礎看護学実習のみであるため、看護について考えるというよりは、自分や親などの身近な人々の生き方について考える機会になったようだ。また、今までの授業で学んだ内容の、理解を深める機会になった。そして、CNSの方の話からは「自分もあんな看護師になりたい」と、漠然としているがこれから目指していく看護師像を描いているようだった。

この度の講演会・シンポジウムは、大変充実した内容であつた。この機会に「自分の人生」を生きぬく力をつけるために、自分には何ができるのかをゆっくりと考えてみたい。